

## 名作再読、拾い読み(2)

『アウル・クリーク鉄橋での出来事』("An Occurrence at Owl Creek Bridge") 小澤 文彦

アンブローズ・ピアス(Ambrose Gwinnett Bierce, 1842-1914?)は、19世紀末に活躍したアメリカ合衆国オハイオ州生まれの作家・ジャーナリストです。痛烈な風刺の効いた『悪魔の辞典(The Devil's Dictionary, 1906)]の作者としてよく知られていますが、南北戦争が勃発したとき北軍に志願兵として参加した経験を基にした短編小説集『いのちの半ばに(In the Midst of Life, 1891)]も有名です。この題名は、キリスト教の葬儀の際に唱えられる祈祷文の冒頭部分In the midst of life we are in death. からとられています。「命の盛りのそのときにも、われわれは死のなかで生きているのだ」(大津栄一郎訳)という意味の通り、常に死と隣り合わせにある状況が描かれています。

ピアスを日本に初めて紹介したのは芥川龍之介ですが、彼は随筆『点心』の中で「短篇小説を組み立てさせれば、彼程鋭い技巧家は少い。評家がポオの再来と云ふのは、確にこの点でも当つてゐる。その上彼が好んで描くのは、やはりポオと同じやうに、無気味な超自然の世界である。」と評価しています。

今回は、この短編小説集の中の『アウル・クリーク鉄橋での出来事』という怪奇的で幻想的な作品をお薦めしたいと思います。あらすじは次の通りです。

南軍を助けるために鉄橋を破壊しようとした男が、北軍に捕らえられて絞首刑に処されようとしています。男の両手は後に回され手首は紐で縛られていました。首にはロープが巻き付けられていました。処刑の瞬間、奇跡的にロープが切れて男は6メートル下の急流に落ちます。水中でもがいているうちに紐がはずれて両手が自由になり、必死に泳いで兵士達が上から撃ってくる銃弾を避け、森の中へ逃げ込みます。一日中、太陽の位置で進む方向を定めて歩きますが、切れ目のない果てなく続く森で、自分でもこんなにひどい原生林の中に住んでいたとは知らなかったと驚くほどでした。日没時には疲れきって足が痛み、空腹も限界に近づいた頃、やっと帰って行く道を見つめますが、誰も通ったことのない道ようで、空には見たこともない大きな金色の星が輝いていました。一晩中歩き続けてようやく自分の家の前に立ち門を開けると、妻がベランダから降りてきて優しく彼を迎えます。彼が両手を前に差し伸べて飛んでいき、まさに彼女を抱きしめようとしたその瞬間、首筋に鋭い痛みが走ります……。

作品の魅力を損なわないように、結末は敢えてここには書きません。短編で短い時間に一気に読める分量です。英文も比較的読みやすいので、是非とも原文に触れた方が味わい深くなると思います。

次に挙げる英文は、死を前にした男が最後の思いとして家族のことに集中しようとしている心理状態、そしてその時に生じた異常なほど鋭敏になった感覚の描写ですが、ピアスの戦場での経験が十分反映されているのでしょう。英文と日本語訳とを一緒に読んだ方が、実感としてよりはっきり感じられると思います。

And now he became conscious of a new disturbance. Striking through the thought of his dear ones was a sound which he could neither ignore nor understand, a sharp, distinct, metallic percussion like the stroke of a blacksmith's hammer upon the anvil; it had the same ringing quality.(中略)With their greater infrequency the sounds increased in strength and sharpness. They hurt his ear like the thrust of a knife; he feared he would shriek. What he heard was the ticking of his watch.(\*1)

(するとその瞬間新たに彼の心を散らせることが起きた。愛しい者たちのことを思おうとしたその瞬間に、音がした。無視することも理解することもできぬ音だった。鍛冶屋がハンマーで金床を打ったときのような、鋭い、はっきりした、金属的な音だった。その音も同じように長く後を引くひびきを伴っていた。(中略)だんだん間遠になるにつれて、音は強さと鋭さを増した。まるでナイフで突き刺されたように耳に痛かった。いまにも悲鳴をあげそうになるのを感じた。彼に聞こえていたのは、懐中時計の時を刻む音だった。)(\*2)

注(\*1) *The collected works of Ambrose Bierce* vol. 2: In the midst of life (Gordian Press, 1966) p. 31

(\*2)『ピアス短篇集』大津栄一郎編訳(岩波書店, 2000) pp. 97-98

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)